

聖霊シリーズ「分け与える賜物」

1A 神から来る賜物

1B 神のご性質

2B 分け与える恵み

3B 「与えると与えられる」原則

2A 与える時の態度

1B 惜しまずに与える

2B 自分への注目

3B 自ら進んで捧げる

4B 喜んで捧げる

5B 愛ゆえに捧げる

3A 捧げる対象

4A 捧げるべきもの

1B 自分自身

2B 賜物と時間

3B 賛美と感謝

本文

聖霊シリーズ、御霊の賜物を見ていっていますが、今晚は「分け与える賜物」に注目します。ローマ 12 章 8 節です、「**勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。**」分け与える人、とあります。

1A 神から来る賜物

1B 神のご性質

まず、分け与えるということは、神ご自身の性質の中にあることを知る必要があります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。(ヨハネ 3:16)」ひとり子をお与えになった。神は愛であり、その愛にはご自分のものを分け与え、ご自分のもので信じる者たちを満たしたいという願いがあります。私たちは、これを、恵みをもって受け入れる必要がありますね。「こんなに尊い贈り物を、私には受け取る資格がありません。私は今あるもので十分ですから。」という躊躇は、いけないことです。神の圧倒的な恵みの贈り物、賜物を、私たちが子どものように恵みをもって、素直に受け入れる必要があります。神の愛をそのまま躊躇いを捨てて受け入れた人は、心に変化が起こります。

使徒ヨハネは、第一の手紙で「4:7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。」と言いました。神の愛を

受け入れると、神と交わります。神と交われれば、その愛が留まっていれば、その神の愛をもって他の兄弟にそれを分かち合おうと願います。神の愛が自分にあると言いながら、兄弟に愛の行ないをしていないのであれば、その人には神の愛はありません。神の愛を、恵みをもって受け入れた者は、その神の愛によって兄弟に分け与えないでいる、ということはありません。

イエス様は弟子たちに、「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。(使徒 1:8)」と言われました。聖霊の力を受ければ、受けるだけでなくそれを分け与えるように導かれます。入力があって出力がなければ、生きないのです。流れません。ですから、私たちが主に仕える、しかも具体的に仕えることなくして、神の聖霊を受けることはできません。御霊の賜物は分け与えるからこそ、受けるのです。与える者が、受けます。

2B 分け与える恵み

そして、ここの箇所「分け与える人」というのは、抽象的ではなく、とても具体的、実際的な捧げ物の話をしています。「私の持っている物は、すべて神のものであります。」と言って、言葉の上ではとても信仰的に聞こえ、神学的に正しいことを言うことはできますが、実際は神に何も捧げていない言い訳として使っている場合が多いです。確かにすべて神のものでありますが、その内に神の賜物を認めている様子は伺うことができません。

けれども、分け与える賜物が与えられている人は、自分の捧げる物、捧げる事柄に対して執着心が見られません。自分の周りにあるものは、自分の所有だという意識がありません。神の所有しておられる物や事柄の管理者と自分をみなしているのです、分け与えることにおいて自由で恵みに溢れています。その人の前では「これはすばらしいですね。」とか、その持ち物についてほめることができません。なぜなら、「どうぞ、持って行ってください。」となってしまうからです。

その人と共にいると、神の恵みの支配が見えます。神の恵みが広がって、惜しみなく分け与える世界が見えます。その人に触れると、その人ではなく神が見えてきます。気前よく分け与える神の姿が見えるのです。「マタイ 20:15 それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。」神は受けるに値しない人々に惜しみなく与える、気前の良い方です。ある人は貪欲になるだけです。いつまでも受け取ることしか知らず、「ああ、もっともらえる。」と喜んでいるだけです。けれども、その恵みを知った人は変えられます。その恵みの中で主を知り、主に自分自身を明け渡し、それで自分も惜しみなく分け与えるように導かれます。

3B 「与えると与えられる」原則

先に話したように、神の愛を知ることは、その愛の中に留まっていれば、分け与えざるをえないようになります。そして分け与えると、神の愛にもっと満たされます。聖霊の賜物が豊かに注がれるには、賜物によって人々に恵みを分け与えなければ、流れていきません。入力があれば、必ず出力があるから、流れるのです。したがって、「与える者は受ける。」という霊的法則が、この世界

には存在します。

イエス様が言われました。「ルカ 6:38 与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」与えると、与えられるのです。自分の量る量りで、自分も量り返してもらえます。使徒パウロは、「2コリント 9:6 少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」と言いました。まばらに種を蒔いたら、もちろんまばらにしか刈り取ることはできません。豊かに蒔けば、豊かに刈り取ります。

私たちは、「捧げたら、それだけ無くなる。」という法則だけを見ている。それはちょうど、重力の法則だけを見ている、空気力学の法則を見ないのと同じです。鉄の塊が、どうして空中に浮くのでしょうか？「そんなのあり得ない！」ということが、いかに愚かかは、羽田空港のそばに住んでいれば自ずと分かります。しかし、捧げることについて、「そんな捧げたら、無くなるに決まっているではないか。」と言って、現に捧げることによって豊かにされている実際を見ないのです。

パウロが、「ローマ 11:35 また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」と言いました。これは言い換えると、「神に与えて、神が「ああ、ありがとう。これこれ足りなかったからね。助かったよ。」というほめ言葉を言わせるほど、与えた人は独りもいない、ということです。神は、私たちが与えると、与えるということが分からない程に、溢れるばかりに私たちに与えられる、ということです。預言者マラキが、この神の心を語りました。「マラキ 3:10 十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。・・万軍の主は仰せられる。・・わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」

神は恵みの神であり、気前の良い方なのです。ですから、与え、捧げる物になおのこと恵みを注ぎ、分け与えの循環を与えてくださいます。多くの人が、「十分の一を捧げる金銭的余裕がない。」と言いますが、チャック・スミス牧師が言いました。「私は、什一を捧げない余裕はありません。神がご自分のものだとして仰っているものを、神に捧げずに手元に置くことなど、そんな心の余裕はないのです。」若い時は、主にどれだけのお金を捧げることができるのか、と考えていたそうです。年を取ってからは、月にどれだけの額を自分のために使おうか、と考えたそうです。主のものなので、捧げる物はお返ししているだけだということです。この恵みの中に入れていきましょう。

2A 与える時の態度

1B 惜しまずに与える

聖書には、分け与える時あるいは捧げる時に必要な、心の態度についていくつか教えています。一つは、「惜しまずに分け与える」ことです。今日の本文です、ローマ 12 章 8 節に、「**惜しまずに分け与え**」とあります。惜しみなく、何の紐も付けずに、分け与えます。それを受け取った人が、「何

かお返しをしなければいけない。」という義務感を与えるような、条件を付けずに捧げることです。英訳によっては、「シンプルに分け与えなさい」となっています。捧げているのに、それを複雑にしてはいけない、ということです。

私たちの教会は、建物が不動産の所有ではなく、時間借りをしているので起こりませんが、教会の建物を所有しているところでは、しばしば、「これを教会に捧げます」という人がいます。けれども、それがあまり教会では役に立たないであろう物品であったりします。ですから、処分しようとする。すると、「なぜ、誰々さんが捧げたものを、そのようにするのですか。」と文句を言います。実は本人がそんなことを、その人にほめかしていたりするのです。それは、惜しまずに捧げたのではないのです。その物品に感情移入されていて、それが紐になっているのです。そのために、教会によっては倉庫に、教会では使わないであろう物品がたくさん積まれていることさえあります。これは、惜しみなく捧げていないものだからです。紐を付けてはいけません。

イエスは、「あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。(マタイ 10:8)」とされました。私たちの受けた永遠の命は、ただで受けたものです。「いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。(黙示 22:17)」と主は言われました。ですから、私たちも憚らなしく与えます。紐を付けずに捧げます。「与える」とか「捧げる」という言葉、それに関連する語句は 1981 回聖書で出てくるそうです。その内、5 対 1 の割合で、神が私たちに与えたものとして使われています。私たちが神に捧げる物以上に、その 5 倍、神が私たちに下さったものとして語られています。ですから、捧げることは神の気前良さに対する応答なんですね。

驚く証しが、チャック・スミスの本に書いてありました。戦中、戦後の人ですが、大量の土を動かす重機を開発しました。それで彼は事業を起こした時に、収入の 10%を主に捧げることを誓約していました。その収益は伸びまして、彼は20%を捧げました。その割合を少しずつ引き上げ、彼が召天する時には、90%を捧げていたそうです。そして残りの 10%で暮らしたのですが、それでも私たちよりも裕福であったとのこと。捧げすぎることはないことを、彼は学んだそうです。これが惜しみなく捧げる時に、惜しみなく施す神との連携が起こっている証しです。

2B 自分への注目

そして、自分が捧げたことが認められたいという動機もいけないと、主は戒められます。「マタイ 6:1-2 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」自分のものを分け与える時、また自分の時間や才能を捧げて、人から認めてもらえないので、いらだつ人がいます。では、認めてもらえたら良いのか？という、それは人からの報いになってしまい、天に報いが残されていないとイエスは言われます。ですから、隠れたところで行いなさい、天の父がそれを見

ておられます、と天からの報いがあることを教えられました。

人に見せるために偽って捧げた人で、主の前で死んでしまった人が聖書には出てきます。アナニヤとサツピラです。地所の全てを売り払って、使徒たちの前で捧げたということになっていました。けれども彼らは、その一部を自分の手に持っていて、それで捧げました。ペテロは、「あなたがたは、聖霊を欺いたのだ。」と言いました。すると死んでしまいました。二人は、手元の代金の一部を取っておいたから殺されたわけではありません。全てを捧げたと言って偽ったから、自分たちが全てを捧げたかのように偽ったから、殺されたのです。偽善の罪です。本当はそれほど捧げていないのに、自分はこれだけ献身していますという印象を人に見せる時、それは危険信号ですね。

3B 自ら進んで捧げる

そして、聖書では一貫して、捧げるのは「自ら進んで行なうもの」ということが書かれています。出エジプト記において、幕屋を造ることで、それに必要な材料を捧げる時に、心から進んで捧げる人であることを、主ははっきりとさせています。「出エジプト 25:2 わたしに奉納物をささげるように、イスラエル人に告げよ。すべて、心から進んでささげる人から、わたしへの奉納物を受け取らなければならない。」主は、強いられて捧げることを望んでおられません。誰かから強い要請によって、捧げることを喜んでおられません。しかし、捧げる心があって、自ら捧げる時に主は喜んで受け入れてくださいます。出エジプト記 38 章 8 節には、青銅の洗盤を作る時に、入口で奉仕をしていた女たちが自分の鏡を捧げたことが書いてあります。女性にとっての、とても大切な物ですが、それでも捧げました。そして、なんと聖所を造る仕事をしていた者たちが、モーセのところに行って来ました。「36:5-6「民は幾たびも、持って来ています。主がせよと命じられた仕事のために、あり余る奉仕です。」それでモーセは命じて、宿営中にふれさせて言った。「男も女も、もはや聖所の奉納物のための仕事をしないように。」こうして、民は持って来ることをやめた。」これが、まさに心から進んで捧げているかを示している箇所です。

4B 喜んで捧げる

そして次は、心から捧げることに似ていますが、「喜んで捧げる」ことです。「2コリント 9:7 ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」ここの「喜んで」というギリシヤ語は、「ヒラロス(ἡλαρός)」は、陽気に、楽しくて、何かやりたくてうずうずしている、という意味合いの言葉です。与えることがしたくて、それでその機会を待っていましたかとばかりに捧げることです。

神は、ここに書かれているように、「嫌々ながら」「強いられて」ということを大変嫌います。そのような捧げ物は、たとえその金額が高いものであったとしても、神は数えておられません。ですから、誰かに言われたから、教会で圧力をかけられているからという理由で捧げたとしたら、それは、神は喜ばれない捧げ物です。私は、教会の中で他の人たちがどう思うか、そうした同調圧力で動く時に、嫌悪感がでます。なぜなら、人の目が気になって行なっていることは、その人が携挙されて主

イエス様の御座の前に出る時に、それら行なったことはみな清めの火によって焼き尽くされてしまうからです。主に対して行なったことのみが、褒美として報われます。強いられてこれだけの額を捧げても、人からは認められるのかもしれませんが、主からは認められないのです。

捧げ物、献金は主と自分との間のものです。しかし、これはしっかりと決めないといけません。ここに、「心で決めたとおりに」とあります。そのためには、礼拝を捧げる前に、自分と神さま独りになっている時に、いくらにするかを決めるとよいでしょう。その場で決めると、その周りの雰囲気や捧げてしまうことになるからです。これは、パウロがコリントの人たちに勧めたことです。「1コリント 16:2 私がそちらに行ってから献金を集めるようなことがないように、あなたがたはおののおの、いつも週の初めの日に、収入に応じて、手もとにそれをたくわえておきなさい。」

5B 愛ゆえに捧げる

そして捧げる時は、犠牲が伴っていないといけません。これを強く叱責されたのは、主ご自身でマラキ書を通して語られました。人間の総督、高い地位にいる役人にさえ、盲の獣を捧げることはない、足なえや病気のを捧げることはない。非常に失礼なことなのに、良質の牛や羊を主に捧げずに、これら残りのものを捧げていると言われました。そのことを、イエス様は、貧しい寡を通して教えられました。「ルカ 21:1-4 さてイエスが、目を上げてご覧になると、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れていた。また、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨二つを投げ入れているのをご覧になった。それでイエスは言われた。「わたしは真実をあなたがたに告げます。この貧しいやもめは、どの人よりもたくさん投げ入れました。みなは、あり余る中から献金を投げ入れたのに、この女は、乏しい中から、持っていた生活費の全部を投げ入れたからです。」主が犠牲をもって私たちに捧げてくださったように、私たちが犠牲を伴う捧げ物が必要です。

けれども最も大事なものは、愛ゆえに捧げるということです。「1コリント 13:3-7 また、たとえ私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。」キリストの愛に駆り立てられた捧げ物かどうかを私たちは、時々、心にある思いを吟味する必要がありますね。

3A 捧げる対象

そして、分け与える時、あるいは捧げる時に、具体的にはいろいろな用途がありますね。すべては神に対して捧げるのですが、その使い道は教会の礼拝のため、教会のさまざまな奉仕に必要な経費、また伝道の働きのためであることは言うまでもないでしょう。

そして、福音を伝える者、御言葉を教える者を支えるためにも捧げるべきであることを、聖書は

教えています。「1コリント 9:14 同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。」「1テモテ 5:17-18 よく指導の任に当たっている長老は、二重に尊敬を受けるにふさわしいとしなさい。みことばと教えのためにほねおっている長老は特にそうです。聖書に「穀物をこなしている牛に、くつこを掛けてはいけません。」また、「働き手が報酬を受けることは当然である。」と言われているからです。」けれども、このように教えているパウロ自身は、負担をかけさせまいと自分の手で働いて奉仕していました。ですから、バランスが必要です。祈りと御言葉の奉仕に専念できるように、生活の支えをしていかなければいけません。けれども、それによって信者たちに大きな経済的負担になるほど、支えるべきではありません。

そして、ここローマ 12 章での文脈では、おそらく貧しい人や、教会で事欠いている人々に分け与えることで書いてあると思います。旧約聖書から新約聖書に渡って、一貫して、貧しい者に施すことによって神の命令を守ることが書かれています。「申命 15:7-8 あなたの神、主があなたに与えようとしておられる地で、あなたのどの町囲みのうちでも、あなたの兄弟のひとりが、もし貧しかったなら、その貧しい兄弟に対して、あなたの心を閉じてはならない。また手を閉じてはならない。進んであなたの手を彼に開き、その必要としているものを十分に貸し与えなければならない。」

イエス様は言われました。「マタイ 25:40 まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」これはもちろん、食べ物がなく、着る物がなく、そういった人々に対して行なうことは、イエスご自身に行なっているという文脈の中で主が語られています。そして教会は、兄弟で困っている人のために予算を使うことで、多くの教えが使徒たちの手紙の中にあります。寡であっても本当の寡を助けなさいという教えが、テモテ第一の手紙にあります。つまり、身よりのないやもめで、主に捧げた姉妹は教会がその扶養をすべきだ、ということです。また、テサロニケ第二三章では、「働きたくない者は食べるな。(10節)」という戒めが書かれており、それは、教会の善意による献金で生活している人で、働こうと思う人は働けるのに、それをせずお節介をしている、という問題がありました。ですから、私たちは貧しい人と言っても、本当に困っている人にそれを使うべきです。

私たちの教会では、貧しい留学生に使ったことはありますが、ホームレスへの働きかけはまだしたことがありません。多くの教会が行っていますが、それはとても聖書的なことです。しかし私たちは、海外の教会の兄弟姉妹には多くを捧げてきました。若い人々の集まる教会で、公安が来ても所有しているので入りづらくなっています。けれども、所有しているのでその支払い額は大きいです。フィリピンでは台風がありました。支援金を送りました。ネパールの大地震でも送りました。そしてイラク人のクリスチャン、イスラム国からの迫害から免れた難民のための支援を送りました。

4A 捧げるべきもの

1B 自分自身

そこで私たちは、何を捧げなければいけないかをもう一度考えてみたいと思います。今、金銭の

ことを話してきましたが、どうしても献金のことばかりを考えがちです。けれども、大事なのは献金ではなくて、献金の前提にある献身であります。ピリピの教会など、マケドニヤにある諸教会は、自分たち自身、迫害によってとても貧しかったのに、エルサレムにいる貧しい兄弟のために、自分たちの力以上に捧げて、「2コリント 8:4 聖徒たちを支える交わりの恵みあずかりたいと、熱心に私たちに願った」とあります。そして、パウロはこう言っています。「8:5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくれました。」捧げるのは、自分自身なのです。ですから献金の前に、献身を主に対して行ないます。「私は、教会の礼拝で千円捧げたのだから、自分の霊的生活をとやかく言われたくない。」という態度は良くないことは良く分かりますね。

2B 賜物と時間

ですから、ローマ 12 章の始まりはこうなっています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」自分自身を捧げる中で、主が各自にキリストの体の中で御霊の賜物を与えてくださいます。それで、6 節から 8 節の言葉があります。「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。」それぞれが恵みによって与えられた賜物を、熱心に用いるのです。つまり、賜物を主に捧げます。そして熱心に用いるのですから、当然ながら時間も捧げます。賜物と時間を主に捧げます。

私たちはいかがでしょうか、いつも次の物差しが正しいかどうかは分かりませんが、動機が愛でなければ全て無意味ですから絶対に正しいということではありませんが、けれども、どれだけ教会に関わっているのか、どれだけ福音の働きに関わっているのかは、客観的に自分がどれだけ捧げているのかを示しています。そして、自分自身がどれだけ捧げているのかは、自分がどれだけ神の恵みを知っているのかの指標にもなります。最近、ある兄弟が私たちの教会にいらっしゃいました。何年も教会に行っていなかった兄弟です。けれども、次の御言葉をくれました。「目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。(1ヨハネ 4:20)」すばらしい告白です、そうです教会の交わりに加わることそのものが、兄弟を愛することであり、神の愛の中にあることです。

そうすると、「いや、病気や不慮の事故、様々な事情で教会に来ることができない人がいるではないか。」という人がいます。いいえ、ローマ 12 章ではいろいろな賜物が異なる賜物が与えられているとあります。つまり、それぞれ置かれているところで、主を求めれば必ず、主に仕えることのできるように主がしてくださいます。仮に全く体を動かすことができなければ、主を愛するその情熱のゆえにそこに人が集まって来て、共に礼拝したという証しが、詩人の水野源三さんにあったと聞いて

ています。

3B 賛美と感謝

そして、捧げるということで、最も大事だと思われる捧げ物があります。それを知るのに、詩篇 50 篇が必要です。50 篇 7 節から読みます。「7-15 節 聞け。わが民よ。わたしは語ろう。イスラエルよ。わたしはあなたを戒めよう。わたしは神、あなたの神である。いけにえのことで、あなたを責めるのではない。あなたの全焼のいけにえは、いつも、わたしの前にある。わたしは、あなたの家から、若い雄牛を取り上げはしない。あなたの囲いから、雄やぎをも。森のすべての獣は、わたしのもの、千の丘の家畜らも。わたしは、山の鳥も残らず知っている。野に群がるものもわたしのものだ。わたしはたとえ飢えても、あなたに告げない。世界とそれに満ちるものはわたしのものだから。わたしが雄牛の肉を食べ、雄やぎの血を飲むだろうか。感謝のいけにえを神にささげよ。あなたの誓いをいと高き方に果たせ。苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」

全てのことは主が行われたのです。自分が苦しい思いをして、それで主に十分に捧げなければそこから救い出してくださらない、祝福してもらえないという考えは大きな間違いです。そうすれば、主は事欠いた方になってしまいます。主は救われるために、全てのことをしてくださいました。私たちにすべきことは、何一つありません。「何一つないのなら、なんで捧げる必要があるのか？」と思う方は、まだ神の全き恵みを知らないのです。何一つないのです。けれども、何かをせざるを得なくなります。それが、感謝です。感謝のいけにえを私たちは捧げます。主がしてくださったことを忘れず、それを思い、その中に留まること、これが救われた魂の最も大きな務めです。

そして感謝と共に、15 節に書いてありますが、「あなたはわたしをあがめよう。」つまり、賛美のいけにえを捧げます。「ヘブル 13:15 ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」賛美のいけにえを捧げます。

どんどん捧げましょう。そして聖霊の賜物としての分け与える力が与えられるように、祈りましょう。聖霊の力が流れ、自分から溢れて、自分が分け与えていくことによって神の恵みが満ちることを願いましょう。